保育エッセイ

子どもは豊かな遊びの世界を生きている①

子どもの遊びを丸ごと見るために

河邉貴子
（大学教員）

豊かさを、丸ごと

どうして遊びは子どもにとって大切なのか。どうして幼児教育では遊びを教育に位置付けているのか。その有用性を言葉で論理的に説明しなければ、「遊びは役に立たないもの」として排除されかねない空気が漂うようになってきた。「遊びは幼児期の重要な学習である」と位置付けるならば、学習効果を証明しなければならないというわけだ。

確かに子どもたちは遊びながら発達に必要な体験を積み重ねている。その「効果」を明らかにすること自体は難しいことではないと思うし、現代において必要不可欠な仕事だと思う。何かしらの視点を提案して遊びの有用性を説明することは可能であろう。遊びの大切さへの認識を維持深化させていくために、非力ながら私も、遊びの質的な深まりを読み取るための視点を考えている最中である。

けれども、遊びを分析的に見る一方で、効果や有用性といった言葉を抜きにして、子ども

河邉貴子（かわべたかこ）
聖心女子大学文学部教授。専門は幼児教育学。主な研究課題は保育記録論、遊び援助論。医療と地域と子どもをつなぐ NPO 活動もライフワークの一つ。

の遊びの豊かさを丸ごと語りたいという気持ちもむくむくとわいてきている。
せっかく頂いたこの紙面。ただひたすらに、子どもの遊ぶ姿の面白さを追ってみることにしようと思う。なぜなら、子どもというのは本当に面白くて、彼らの遊びはオソレイリマシタと言いたくなるようなことの連続だから。

子どもには世界がどのように見えているのか

子どもの目には世界がどのように見えているのだろうか。
あるお母さんが、子どもと図書館に行って、トイレに連れて行った時のエピソードを報告してくださった。
「杖を使っている高齢者の方のために、トイレの洗面台に、杖をここに置いてください、と表示付きのフックがあったんですけど、うちの娘はそれを見た途端、目を輝かせてこう言ったんです。『お母さん、すごい、この図書館には魔法使いも来るんだ！』」
本当に、魔法使いが来るような図書館だったら、どんなに素敵なことだろうか。私たち大人は「便利さ」や「効率の良さ」という視点で身の回りの環境を見がちだけれど、子どもの目には、世界は少し違って映っているのだろう。そのものをそのものとしてだけ見るのではなく、そこから始まる物語を面白がるまなざしが、子どもの中には内蔵されている。だからどこにいてもどんな時にでも遊びだすことができる。そんな子どもの傍らにいると、世界は面白さと喜びに満ちていることに気付かされる。

子どものまなざしの豊かさ

しかし、子どもは世界をいつも明るく見ているばかりでもない。自分の遊びの原風景をさかのぼってみると、さまざまな言葉にできない感情を抱えていたことが思い出される。

私は、幼稚園には在園期間の半分くらいしか通園しなかった。信州伊那谷の小さな集落に住む祖母が病気になり、嫁である母が看病に行くことになったからである。姉は小学生だったので近所の家に預けられ、四歳の私と二歳違いの弟は信州の山の中で暮らすことになった。隣人が他人の子どもを預かってくれる、いい時代だった。

幼稚園を無期限休学となった私は、看病に忙しい母の目の外で、村の子どもたちと朝から日が落ちるまで、野山を駆け回っていた。

村の真ん中をやがて天竜川に注ぐ小さな川が流れていて、一本の橋が架かっている。その橋をめぐる川向こうの集落の子どもとの激しい泥団子戦にオミソとして参加したり、村の人の田植えの傍らで泥遊びをしたり。家ではお蔵の前の三和土（たたき）をままごとの場所と決めていて、野草を摘んではご飯作りをしていた。三和土のひんやりとした感触を、今でも、いつでも、思い出せる。

一人遊びの時間も長く、二時間に一本、町からやって来るバスが山間を見え隠れしながら走るさまに手を振ることさえ遊びだった。

私の体はいつも地べたの近くにあり、ほとんど自然の一部だった。

そんな躍動的な記憶が鮮明である一方、どうにも表現できないような感覚も心に刻み込ま

れている。

村の人は日中の暑いさなかは野良仕事をしない。昭和三〇年代の農家の仕事は機械化されておらず、その労働は今以上に過酷なものだったろう。お百姓さんたちは昼ご飯の後の二時間余り、体を休めるために昼寝をする。

子どもの私は遊びたくて仕方がない。真っ昼間に外に出ると、村は静まり返っている。

焦げ付くような日差し
ビーチサンダルの底が溶けそうに熱したアスファルトの道
立ち上がる陽炎とうるさいほどの蝉(せみ)

死んだように眠る村の真っただ中で、私だけが「生きて」いる。異世界に迷い込んだような心細さと、遊びたい気持ちの強さのはざまで立ちすくんでいる自分がいた。

時々、私の中の「四歳児の私」が語りかける。

子どもというのは明るくて元気で、遊びに夢中になっているばかりではないよ。明るいが故に、逆光で周囲が真っ暗に見えてしまうような怖さを対比的に体験しているかもしれない。生と死が意外に近いことに気付いているかもしれない。そして、子どもなりに、いや子どもだからこそ、言葉で十分に表現できないからこそ、ある強烈な「一瞬」を、一枚の画像として心に抱えるかもしれない。だから、小さな子どもには、心を留めて、丁寧に向き合わなければならないのだと。

子どもの遊びの世界を丸ごととらえようと思ったら、小さな子どものまなざしは、大人が考える以上に多様で豊かであることを理解しておく必要があるのかもしれない。